

ふきすゝみて、其日の申の時に、出雲國につかせ給ひぬ、こゝにて人々こゝちしづめける、同じ廿五日、伯耆國稻津浦といふ處へ移らせ給へり、此國に那波の又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いとまうにとめるが、類廣く心もさかしくむねしくしき者なり、彼がもとへ宣旨をつかはしたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百餘騎の勢にて御迎へに參れり、○中舟上寺といふ處へおはしませせて、九重の宮になすらふ、

〔太平記 十一〕諸將被進早馬於船上事

都ニハ五月十二日、○元弘三年千種頭中將忠顯朝臣、足利治部大輔高氏、赤松入道圓心等追々早馬ヲ立テ、六波羅已ニ没落セシムルノ由船上へ奏聞ス、○中同廿三日、伯耆船上ヲ御立有テ、腰輿ヲ山陰ノ東ニヅ催サレケル、路次ノ行粧例ニ替テ、頭大夫行房、勘解由次官光守二人計コソ衣冠ニテ供奉セラレケレ、其外ノ月卿雲客、衛府諸司ノ助ハ、皆戎衣ニテ前騎後乘ス、六軍悉甲冑ヲ著シ、弓箭ヲ帶シテ、前後三十餘里ニ支ヘタリ、鹽谷判官高貞ハ、千餘騎ニテ、一日先立テ前陣ヲ仕ル、又朝山太郎ハ、一日路引後レテ、五百餘騎ニテ後陣ニ打ケリ、金持大和守、錦御旗ヲ差テ左ニ候シ、伯耆守長年ハ帶劔ノ役ニテ右ニ副フ、

〔太平記 十一〕書寫山行幸事附新田注進事

五月廿七日ニハ、播磨國書寫山へ行幸成テ、先年ノ御宿願ヲ果サレ、○中廿八日ニ、法華山へ行幸成テ御巡禮アリ、是ヨリ龍駕ヲ早メラレテ、晦日ハ兵庫福嚴寺ト云寺ニ、儲餉ノ在所ヲ點ジテ、且ク御坐有ケル、○中此寺ニ一日御逗留有テ、供奉ノ行列、還幸ノ儀式ヲ調ヘラレケル、

〔太平記 十一〕正成參兵庫事附還幸事

兵庫ニ一日御逗留有テ、六月二日、瑤輿ヲ廻ラサル、處ニ、楠多門兵衛正成、七千餘騎ニテ參向ス、○中兵庫ヲ御立有ケル日ヨリ、正成前陣ヲ承テ、畿内ノ勢ヲ相隨ヘ、七千餘騎ニテ前驅ス、其道十